



情報ボックス

子ども期の生活環境が悪かった男性の場合、スポーツクラブ参加歴が長いと機能障害リスクが7割低い

日本老年学的評価研究機構 (JAGES) がプレスリリース

日本老年学的評価研究機構 (JAGES) は2月13日、プレス発表会を開催し、「子ども期のスポーツクラブ参加経験は社会経済的不利による機能障害リスクを7割軽減」とするプレスリリースを行った。

生活機能低下 (機能障害) は、QOL低下や健康リスクの要因であるだけでなく、介護者の負担につながる。子ども期の生活環境の悪さが将来の機能障害リスクとなることはわかっているが、リスクを軽減する要因は明らかになっていない。同研究では、「部活動」が子どもの運動面だけでなく、心理的発達や社会的つながりを育むことに役立っている可能性があることから、子ども期のスポーツクラブ参加経験が社会経済的不利による高齢期の生活機能障害リスクを緩和するかどうかを検証した。

調査対象は、2016年実施のJAGES調査に参加した高齢者1万6095人。生活機能については、老研式活動能力指標を用いて評価し、10パーセント未満のスコアを生活機能障害と定義。子ども期の生活環境については、「あなたが15歳当時の生活程度は、世間一般からみて次のどれに入りますか？」という質問で「上」「中」「下」の3群に分け、子ども期のスポーツクラブ経験については、「6~12歳」「13~15歳」「16~18歳」の3期間のうち、スポーツクラブ参加期間の合計数で算出した。

その結果、男性では子ども期のスポーツ経験なしが59.2%、1期間が27.5%、2期間以上が13.3%。女性では、経験なしが75.5%、1期間が17.8%、2期間以上が6.6%で、男女ともに子ども期のスポーツクラブ参加経験期間が長いほど機能障害リスクが低いことがわかった。とくに男性では、子ども期の生活環境が低いほど、スポーツクラブ参加経験による機能障害リスク減が大きく、緩和効果が認められた。男性では子ども期の生活環境が「下」群では、スポーツクラブ参加期間なしの場合、機能障害割合が20%だった一方、スポーツクラブ参加経験が2期間以上の場合には機能障害割合が6%で、7割ほど少なかった。女性では、子ども期の生活環境のレベルにかかわらず、2期間以上スポーツクラブに参加した経験があると機能障害リスクは40%低かった。

分析を行った東京科学大学公衆衛生学分野准教授の谷友香子氏は、子ども期のスポーツクラブ参加経験が男女ともに高齢期における機能障害リスクの低さと関係していたことから、「社会経済的に恵まれない子どもたちが利用できるスポーツ環境の整備がその後の生活機能向上に役立つかもしれない」と指摘している。

国内外の広範な情報の分析・評価を行い 感染症インテリジェンス・ハブの役割を担うJIHS

内閣感染症危機管理統括庁が
感染症インテリジェンスをテーマにシンポジウム開催

内閣感染症危機管理統括庁は2月9日、シンポジウム「情報の力で備える感染症危機～見えないリスクを捉え、わかりやすく伝えるために」をオンライン開催した。

「内閣感染症危機管理統括庁の取組とJIHSへの期待」と題して登壇した内閣感染症危機管理統括庁の内閣審議官・眞鍋馨氏は、同庁が令和5年に次の感染症危機に迅速・的確に対応できる体制を整えるために設置されたと説明。その中で、内閣感染症危機管理対策官すなわち厚生労働省医務技監が結節点となって、厚生労働省感染症対策部、国立健康危機管理研究機構 (JIHS) の政策的ニーズに沿った科学的知見や専門的知見の収集分析・提供を確保して一元的に対応するとし、「内閣感染症危機管理統括庁は関係省庁や関係機関と連携し、感染症危機管理の司令塔として機能する」と説明した。設置後は、新型インフルエンザ等対策政府行動計画を令和6年に改定し、毎年度、実施体制、情報収集・分析、サーベイランス、リスクコミュニケーション、まん延防止、国民生活・国民経済等について各省庁等にヒアリングし、行動目標の達成に向けたフォローアップを行うことになっているとした。なお、フォローアップの結果報告は、6月頃に行われる。このほか、海外発生時の政府の初動訓練として、政府対策本部会合を含む、一連の感染症危機管理対応訓練の実施とともに、公式WebサイトやSNSを用いた平時からの普及啓発に力を入れているとした。一方、政府に科学的知見の提供を行うため、国立感染症研究所と国立国際医療研究センターを統合したJIHSには、①海外の情報収集、②実践的な研究開発、③科学的知見の提供、④感染症研究の牽引を期待するとした。

「感染症インテリジェンスのハブとしてのJIHSの役割～JIHS設立から11か月の取組状況」と題し基調講演を行った国立健康危機管理研究機構理事長の國土典宏氏は、同機構のメイン機能として、①感染症インテリジェンス、初動対応、②研究開発基盤と臨

床試験ネットワーク、③全病態に対応できる高度先進医療、④人材育成・国際協力を挙げた。このうち、感染症インテリジェンスについては、サーベイランスや公式・非公式なリソースからの発生情報、病原体に関する臨床的・疫学的知見などの感染症情報、社会的インパクトを含む評価のための情報、研究開発に関する情報などを分析・評価、統合・翻訳、コミュニケーションしながら、政策上の意思決定に使える情報を提供することと解説。政策課題を見出し、意思決定する内閣感染症危機管理統括庁に適切に提供することが初動における重要な役割・機能とした。そのため、関係学会や医療機関、地方自治体、海外専門機関など広範で深い情報収集を行い、タイムリーに提供する感染症インテリジェンス・ハブの役割を果たすとした。とくに、情報収集・分析・リスク評価に向けては、急性呼吸器感染症サーベイランスや下水サーベイランスなど複数の情報から正確な把握を行う平時の感染症サーベイランス、実地疫学専門家などの人材育成、発生初期段階に迅速に病原体の特徴等を把握するために行われるFF100 (first few hundred調査) のために検疫所や自治体、医療機関、学会等と緊密に連携した体制の整備など有事を見据えた対応の強化を行うとした。国内外のネットワーク強化については、国内では有事に臨床研究・治験が即座に行えるよう感染症指定医療機関との体制強化を図るため、iCROWN (感染症臨床研究ネットワーク事業) に取り組み、現在39病院に拡大。「さらに研究機関や大学病院なども加え、全国展開する」と述べた。また国際連携については、新興再興感染症の基礎的な研究を行うJ-GRID+ (感染症研究国際展開戦略プログラム) とともに、臨床試験の実施促進と最適化を担うARISE (ARO alliance for Southeast and East Asia) や診断検査・動向調査を行うアジアラボラトリーネットワークなどを整備したと述べた。コミュニケーションの強化については、感染症情報共有会議を開催し、その中で海外の発生情報を中心にニュース、SNS、医療従事者の気づき、噂といった多様な情報源から異常な事象を早期に探知・収集する感染症EBS週報を示すとともに、一般向けにサイト等で情報提供しているとした。さらに人材育成では、実地疫学専門家養成コースやサーベイランスオフィサープログラム、国際感染症インテリジェンス研修、感染症危機管理リーダーシップ研修を実施しているとした。そして最後に、「間もなく設置から一年が経つが、とくに重要な情報収集・分析・リスク評価を軸にここまで準備してきた。今後も国民に応えられる機能をより充実させる」と述べ、講演を締めくくった。

独り好きの人は、仲間はずれを体験しても感情の表出・処理が抑えられている可能性

東京都健康長寿医療センター研究所が
仲間はずれ後の脳を機能的MRI等で測定

東京都健康長寿医療センター研究所は2月10日、独り好き志向性の高い人は、仲間はずれなどの社会的排除を経験した際、感情評価に関わる脳領域（前部島皮質）の活動が低下する一方、身体感覚を処理する領域との結びつきが強まるというプレスリリースを行った。国際雑誌「Journal of Affective Disorders」(1月27日付) に掲載されたもの。

「仲間はずれ」や「無視される」などの社会的排除を経験すると、強いストレスや苦痛を感じる。前部帯状皮質 (ACC) や前部島皮質 (aINS) などの脳領域が関与するため、これらは「社会的痛み」を処理する中枢と考えられている。しかし、一人であることを好む「独り好き」な人がこのような社会的排除にどのように反応するかについては明らかになっていない。また、独り好き志向性が高い人は、対人関係に適切に対処でき、社会的排除に対する耐性がある可能性が指摘されているが、脳がどのように反応しているかは、十分に検討されていない。

そこで本研究では、健常成人40人を機能的MRI (fMRI) とともに、抑うつ、孤独感、「独り好き志向性」の程度を質問紙で測定し、その後、fMRI装置内で他者とボールを投げ合うゲームに挑み、「仲間はずれ」の状況を体験。12ブロックの課題終了後に苦痛の程度 (主観的な苦痛) を評価した。

その結果、独り好き志向性が高い人ほど、抑うつ症状や孤独感が高いことが確認された。仲間はずれにされた際、独り好き志向性が高い人では、左前部島皮質の活動低下 (脱活性化) が認められ、前部島皮質と身体感覚を処理する二次体性感覚野との機能的結合が強まっていたことを確認した。また、前部帯状皮質の活動が主観的な苦痛の強さと関連していた。一連の結果は、独り好き志向性が高い人では、内面的な社会的痛み自体は保持されている一方、それに伴う感情の表出・処理が抑えられている可能性が示唆された。すなわち、社会的排除に感情的な評価を抑制しつつ、身体感覚的な処理へと重心を移すという特徴的な反応を示していた。これは、社会的痛みを軽減するための適応的な感情調整戦略、あるいは不安や抑うつの高さに関連する「代償」を伴う戦略である可能性がある。つまり、独り好き志向性が高い人は感情を鈍らせ、表面的には平静を保っているように見えるものの、その背景では社会的痛みを強く処理している可能性が示された。

(記事提供=株式会社ライフ出版社)

